

「国語表現法」における教育プレゼンテーション

- 方法と実践 -

稲 垣 広 和

1 はじめに 科目特性

中京大学文学部 2023 年度の「国語表現法」（担当稲垣）の講義概要について、シラバスでは以下のように記している。

この講義は「国語表現法」という名のしめすとおり、国語の表現に関する様々なスキル（技術）を修得するために実践的な講義をおこないます。

言語コミュニケーションをはじめとして文章作成法や文章の論理的理解および論文作成における資料調査等の実践など、文字言語表現および音声言語表現の総合的な国語表現能力に関して、そのアウトラインを示していきます。

また将来中学および高等学校の国語科教員を目指す受講生のために、基礎的な国語に関する知識についても講義内で確認・解説をおこないます⁽¹⁾。

扱う内容が広範囲にわたり、ややもすれば表面的な国語表現概論をなぞるようなものになりがちな講義内容だが、なるべく具体的、実践的な学修および大学在学中はもとより将来社会人として有効な学修をこの科目では目指している。

加えて対象学年を概ね 1 年次と想定したこの科目の受講生が、小学校から高等学校までの国語科学習で抜け落ちている既習事項や将来国語科教員として身につけておくことが望ましい知識等についても「落ち穂拾い」的にフォローすべく講義内容を計画した。

本稿では、2023 年度「国語表現法」における学習材の一つである教育プレゼンテーションについて具体的な教育実践報告およびその考察を試みた。

2 教育プレゼンテーションに対する理解

2-1 プレゼンテーション能力の必要性

言語コミュニケーションの必要性を今さらここで指摘するまであるまい。現行の学習指導要領（小学校から高等学校まで）や大学でのアカデミックスキルや一般社会におけるコンピテンシー（行動特性）など、非常に広汎なシチュエーションで言語コミュニケーション能力が求められている。

その中でもプレゼンテーション能力は直感的にその重要性がイメージしやすい言語コミュニケーション技術の一つであろう。

例えば社会的な要請としてのコミュニケーション能力を見た場合、日本経済団体連合会（以下経団連）の「2005年度・新卒者採用に関するアンケート調査集計結果」（2006年1月26日発表）によれば、採用選考にあたっての重視点（複数回答可）として1位はコミュニケーション能力（75.1%）、2位はチャレンジ精神（52.9%）、3位は主体性（52.5%）、4位は協調性（48.7%）（以下略）があげられている。

このアンケート調査では、企業が具体的にどのようなものを「コミュニケーション能力」と認識・規定しているかは明らかにされていないが、20年ほど前からコミュニケーション能力を重視した採用方針であることは回答から読み取れる。

また2004年の経団連「企業の求める人材像についてのアンケート結果」では企業の文系大学・大学院に対し期待する能力と文系大学・大学院が教育面で注力している点について大きな隔たりが指摘されており、以下のような点が今後の検討課題として指摘されている。（下線部は稲垣が付した）

第1に、学生のコミュニケーション能力が不足している点である。事務系人材、技術系人材ともに多くの企業が採用選考時にコミュニケーション能力を重視すると回答しているが、学生に対する評価は低い。この点、何らかの対応が必要である。

第2に、事務系人材（主に文系学生）の育成のあり方である。事務系人材
(2)

(文系学生)は、「社会人として将来何をやりたいのか夢や目標を持っている」「自ら立てた目標に向けて粘り強く努力した経験を持つ」という目的意識にかかわる設問や、論理的思考力、知識レベル、独創性について、技術系人材（理系学生）より低く評価されている。この結果を踏まえ、文系学生に対する学習の動機付けや教育方法などに問題がないか検討を要するのではないか。

第3に、企業が人材育成の面で大学に期待する点と、大学の意識や取組みが乖離していると考えられる点である。例えば、事務系人材の育成のために、企業側は大学に対し、自分の考えを導き出す思考訓練を最も優先順位の高いものとして強く期待している。大学側の実際の意識や取組みはどうか、産業界としては、こうした問題意識を、大学をはじめとする教育関係者に伝えていきたい⁽²⁾。

以上を見てもわかるように、多くの企業は求める人材（新入社員）に対してのコミュニケーション能力等に不足を感じており、と同時にそれらの点については大学教育に対しての期待の高さがうかがえる。

もちろん、大学教育の中でもコミュニケーション能力の一つであるプレゼンテーション能力は重要なアカデミックリテラシーであり、特に初年次教育ではその重要度は高い⁽³⁾。

2-2 教育プレゼンテーションの定義

プレゼンテーションの定義については多岐にわたっていて、いろいろな文脈・言説レベルで多層化した様相を呈している。

一般的な辞書などでは「示すこと、見せること、発表、説明、講演、(学会などの)口頭発表」(「ランダムハウス英和大辞典」小学館)や「企画案の提示、説明。広告用語では一般に、広告会社が新たな広告取扱いを獲得するため、広告主に対し、特定広告キャンペーンの企画を提案することをいう。」⁽⁴⁾

また他にも国立国語研究所「外来語」委員会では「外来語」言い換え提案(第1回、平成15年4月25日)で「プレゼンテーション」について以下のように示されている。

(意味) 企画や発案などを分かりやすく発表すること、手引き

- 「プレゼン」という略語もあり、この語が定着しつつある分野もあるが、分かりにくいと感じる向きもある。一般向けには、言い換えたり説明を付けたりすることが必要である。
- 文脈に応じて、その他の言い換え語例に示すような、他の単純な語で言い換えることができる場合も多い。
- 指し示す内容によって、「提案説明」「売り込み説明」「招致演説」「企画提示」などと、発表の内容を具体的に表す語で言い換えることも効果的である。

さらに「プレゼンテーションは一方的な意見の伝達ではなく、インタラクティブ（双方向的）なコミュニケーションである」⁽⁵⁾ や「プレゼンテーションとは、複数の聴き手に対して、学習の成果や文献の内容、自分の意見などを口頭で発表することをいいます。」⁽⁶⁾ といった捉え方もある。

このような中で講義で扱うプレゼンテーションをなるべく限定的・具体的な定義である「教育プレゼンテーション」とし、授業実践を進めた。

なお今回の「教育プレゼンテーション」は堀裕嗣の定義「一定の時間内で特定の聴衆に対し、わかりやすく楽しく、説明したり説得したりするための総合的な演出技法」としその目的を「聴衆に 見返し を期待」する、つまり「行動意欲を喚起する」こととした⁽⁷⁾。これは堀の説明する「教育プレゼンテーション」が、国語表現・国語教育の教育実践に際して教育的有効性の高い方法論だと思われるからである。この「国語表現法」の授業でも多くの具体的実践法を参考にした。

2-3 受講生のプレゼンテーション理解

講義で前項（2-1、2-2）のようなプレゼンテーションの理論的内容について説明した際、当該回のリアクションペーパーの記述では約7割程度の受講生はその内容について理解していたようだが、一部にはまだ高等学校までの「調べ学習」との違いを意識できない受講生もいた。

しかしプレゼン終了後の自己評価プリントでは受講生の多くが知識理解とプレゼンテーションリテラシーに関しての伸長を実感した旨の記述があった。

3 グループ作成 グループ学習について

この教育プレゼンテーションの前に「自己紹介の理論と実践」という学習材をおこなった。これは自己紹介を「自己表現」の一種として自覚をし、戦略的に聴衆に自己アピールをすることを意図したものである。

この自己紹介は、自己分析 自己分析の文字言語化（自己紹介文の作成および自己添削） 自己紹介の実践（音声言語化） 自己評価 評価の集約と共有などが大まかな内容であった。

自己紹介がいわば「個人戦」であったので、その次の学習材としてグループワークを取り入れた教育プレゼンテーションを行うことにした。

3 - 1 グループワークの定義とその意義

丹治光浩は「グループワークとは、二人以上の個人が集団活動に参加することで相互に影響を受け、心理的に変化・成長・発達するプロセスをいう。」⁽⁸⁾と定義している。またグループワークの意義については「大学等におけるキャリア教育実践講習テキスト」⁽⁹⁾によってその意義が以下のように示されている。

- 学習は、本来、学習する者が自ら発し、自らが活動して行うものであるが、講義形式による知識を注入される学習方法では、学習者は受け身のままで主体的にはならず、学習者個々の個性的な思考はおしならされたままである。これに対し、グループワークは、注入され、承るだけの学習を、学習者の活動として主体化し、学習者相互のやり取りによって一層活性化することに役立つ。
- グループワークは、メンバー相互の話し合い、双方向での関心の交流を通して、参加者全員が持つ経験や背景を共有させることにより、課題の解決を図ったり、相互の共感を共有することによって学習、動機づけ、必要な態度の形成に至ることを目的とする。
- グループワークは、言語的なコミュニケーション、活動、人間関係、集団内の相互作用等を通して、メンバー一人ひとりが成長することを目的とするが、

とりわけ、グループ独自のダイナミクスを活用することで、メンバーの人格的な発展や思考の発展・課題の解決等に繋げることができる。

- グループワークで求められるコミュニケーション能力、メンバーが役割を分担した上で相互に協力・協働して課題に取り組む姿勢、人の話を聴く力と自分の意見を述べる力、自分の意見を主張する力と他人の意見を受け入れる力、決められた時間内に課題を解決して答えを出す力等は、学生が社会に出てから活動するために必要な力である。

少し長い引用だったが、上記の解説はグループワークの意義についてほぼ網羅されていると言って良い。そしてこれらの意義について講義では「グループワーク参加者全員が正しく認識し、行動することが大切」とであると説明した。

またここではグループワーク全体のファシリテーターを教員が行った。これは将来教育現場におけるグループ学習の際のファシリテーターのロールモデルを意識したものであった。さらに、それぞれのグループリーダーには、グループワークファシリテーターとしての役割を担ってもらった。

3 - 2 グループ作りの実際

グループ結成実践工程は以下の通りである。

グループ学習の意図および教育的効果の確認 (3-1)

グループ結成 (結成後はメンバー表提出)

人数 (5~6名)

グループ名の決定

リーダー (役割の決定、ファシリテーター、プロデューサー)

留意点

- ・ 1 グループの人数は受講生全体が 30 名程度ということもあり 1 グループあたり 4 名~6 名とした。これはプレゼンテーションの 1 グループあたりの時間を 15 分程度としたため、1 コマの授業時間で終了することを考慮してのことだった。もちろんバズ学習は一般的に 6 人程度を基準としたり、他の小グループ学習の適正人数に関する研究などでもほぼ同程度の人数が示されている。

ただここではグループの人数に関しては(1)メンバー個々のプレゼン準備負担が過剰にならないこと、(2)メンバー個々のプレゼン準備負担の公平性が担保されること、同様にフリーライダーを現出させないこと、というような視点からメンバーの人数を決定した。

- ・メンバーの決定方法に関しては、受講生個々が話し合いで決めた。その際には無所属の受講生がいないようにアナウンスをおこなった。
- ・個々のグループ名はそれぞれ話し合いで決定した。便宜的に「1班、2班……」と分けても良かったのだが、あえてグループ名を付けることによりグループへの帰属感を高めること(コーポレート・ステイトメント的なもの)を意識させた。

4 本の基本情報 本の情報リテラシー

4-1 個人の準備

今回の教育プレゼンテーションのテーマは「一冊の本を勤める」とした。その準備過程としてまずは受講生1人1人の「おすすめの本」を選定し、プレゼン準備プリントを作成した。その準備は以下の通りである。

まずは中京大学図書館に行き、プレゼンしたいと思う本を選ぶ。

今回は選定対象の本を中京大学図書館に限定した。その理由の一つは教育プレゼンテーションの目標である「行動意欲の喚起」を意識したからである。

プレゼンを聞いた受講生が「面白そうだ」と思い、そのまま図書館へ足を運ぶことを期待してのことである。

また、最近は図書館の検索も優れており必要な本をピンポイントでさがすことが容易になっているが、そのことが逆に本を知る機会を狭めることになりはせぬかという懸念があった。実際に図書館へ行き、開架の本棚のラインナップを眺めることで自分の知らなかった作家や作品に触れることを期待した。

実際に受講生と共に図書館へ行った時には、受講生の興味の所在や時代やジャンルに限定されない質問などを個別に聞くことができた。通常講義に関する質問等は講義の前後やメールでの対応をしているのだが、図書館での質問は質量ともに多かったのは想定外のことだった。

個人用のプレゼン準備プリントを作成する。

今回の教育プレゼンテーションは最終的にグループ発表で行うのだが、まずは個別のプリントを作成したのちグループの本を1冊選ぶという方法をとった。これは受講生が個別に本の情報リテラシーを高めるという意味や、グループ内での候補策定の話し合いをする際の情報共有の簡便さを狙ったものである。具体的には以下のようなフォーマットのプリントを作成した。(なおこのプリントは講義課題として受講生全員が提出した)

4 - 2 個人用フォーマット サンプル

2023 年度「国語表現法」(中京大学文学部) 07 回 (11/17) 金曜日 3 限目

学年 [*] 所属 [文学部日本文学科] 学籍番号 [* * * *]

氏名 [* * * *] ふりがな [* * * *]

講義課題 「講義内で説明したお勧めの本の情報を書きなさい」

留意点

- (1) ワードで作成し課題 BOX に提出してください。(締め切り厳守 2023 年 11 月 19 日)
- (2) 課題提出時は学籍番号・氏名をファイルに明記してください。

(以下の情報を参考にして作成してください)

今回の本は小説・中京大図書館しぼりです。

- 1 書名「ふしぎな図書館」
- 2 作者名(訳者名) 文 村上春樹 絵 佐々木マキ
- 3 出版社 講談社
- 4 発行年月日 2005 年 1 月 31 日
- 5 総ページ数 92
- 6 中京大学図書館 整理番号・ID のどちらか Mu43
- 7 おすすめポイント (600 字以上 1200 字以下)

内容は自由

この図書館の地下には牢屋がある。主人公「ぼく」はいつものように図書館に来て、本を借りようとしていた。しかし、図書館はいつもより静かで、見たことのない女の人が貸し出しコーナーに座っていた。本を借りようすると、図書館の奥へ奥へと連れていかれ、怖いおじさんに会った。そこからさらに地下の迷路を通るとそこには牢屋があった。そこから二人の登場人物の力を借りて脱出するというお話だ。

この本の一番のおすすめポイントは、先が全然読めなくて起きることがすべて

衝撃的なことだ。図書館に牢屋があるのも、登場した時は顔が怖くても優しくったおじいさんが実は悪い人だったのも、あまりにも突然起こるのでどういことなのが続きが気になっていく。しかし、読んでいるときは突然起こったと思っていたが、読み終えた後に最初に戻ると、図書館の常連である「ぼく」が見たことのない人が出ていたり、いつもと雰囲気が違うことが書かれていたりした。この図書館で起こった不思議で恐ろしい出来事は、最初から起こる伏線が張られていたのがこの本の素晴らしいところだ。

主人公の「ぼく」は何歳なのかは物語内で明かされていない。しかし、主人公の心情描写を見ると推測ができる。「ぼく」は突然牢屋に閉じ込められて大変可哀相ではあるが、自分の内気な性格を母親の育て方のせいにして怖いおじいさんに言い返すことをしなかったからこうなってしまった。物語内で終始母親の心配をしているが、時には上手くいかないことを母親のせいにしていているところが、親離れはできていないが反抗期に入りかけでもある、小学校高学年あたりだと考えられる。このように短い物語で明かされていないことが多いが、描写から読み取り推測できるくらい丁寧に書かれているのもおすすめできるポイントだ。

4-3 グループ資料の作成

4-2 で作成した個人用フォーマットをもとにグループで話し合い、プレゼン用の本を決定した。つぎに選ばれた個人用フォーマットをもとにプレゼン用の資料の作成を行った。4-2 の 1 ~ 6 の再確認と 7 のおすすめポイントのブラッシュアップを行った。

ここでの留意点としては以下の点を中心に説明した。

- ・ あらすじだけを書かない（ネタバレを防ぐ）
- ・ 物語の図式化
- ・ おすすめポイントの理由をオーディエンスにわかりやすく説明する工夫
- ・ 発表時間を有効に使うことを意識した資料作り

資料作成については教員からの説明がマニュアル化しないようにつとめた。受講生からは発表時にパワーポイントの使用の可否についての質問があったが、それぞれのグループの状況に合わせて決定するように説明した。ただし、クラス全体がプレゼン前に共有するのはグループごとに提出した資料のみで、パワーポイントを使用した発表時には資料との関係性がわかりやすいこと（パワーポイント作成・発表に酔いしれないこと）を各グループに求めた。

5 プレゼンテーションの準備 教育プレゼンテーションのプランニング

堀裕嗣は一般的なプレゼンテーションの準備として、以下の6段階を示している⁽¹⁰⁾。

目的 を明確にもつ。

聴衆 を分析する。

コンセプト を決定する。

プレゼンテーション・プラン を作る。

プレゼンテーション・ツール を用意する。

リハーサル を行う。

堀はこの後6つの項目に沿って教育プレゼンテーションのプランニングの方法を具体的に説明しているが、本講義では ～ に関してはグループ資料作成の段階で、終了していたので（グループごとに毎時間、進捗状況をメールで報告）の プレゼンテーション・プラン としてグループ内の役割表および工程表の作成を行った。

そして プレゼンテーション・ツール に関しては多くのグループがパワーポイントを作成したが、それ以外のグループでは紙芝居を作成したり、プレゼンで取りあげた本の一部をラジオドラマ化したグループなどもあった。またおすすすめポイントの内容に関して小説の時代背景に注目して、歴史の流れを中心に説明したグループもあった。

次に の リハーサル に関してだが、初めは受講生の中にはその必要性を感じていない者もいたし、あまり熱心ではないグループも存在した。ただ実際にプレゼン原稿を作成し、発表の通し稽古や機器の準備、撤収まで含めた時間を計算しないとほとんどの場合は成功しなかった。逆に と をしっかりと準備をしたグループは、2度3度とリハーサルをする時間を確保し、発表内容をブラッシュアップできたようだ。（リハーサル準備がしっかりとできたグループは、当然のようだが振り返りにおける満足度も高かった）

6 プレゼンテーションの実践

1 グループの持ち時間は 15 分で、準備から撤収までとした。発表で使用するノートパソコン等は各班で用意をし機器の接続も発表者が行った。

7 プレゼンテーションの評価

各グループが発表をしている時に、他の受講生は発表を聞きながら評価をメモするように説明した。評価のポイントとしては 発表準備 発表内容 発表技術の 3 点を中心になるべく個別的・具体的に記述するように説明した。また自己評価に関しては グループ内での自分の役割について グループ全体の今回の活動についてであった。

これらはどちらも 良くできた点 改善点の両方の記述を求めた。

8 受講生の感想

[1]

今回教育プレゼンテーションを実践して、正直あまり良い出来ではなかったと思う。準備不足だった。もう少し詰めることができたと感じた。

寸劇を発表冒頭に行ったが、実際やってみると、それを後半のプレゼン部分に活用できていなかった。意図としては「意味深に終わる第一話」から、続きを気になってほしいというものだったが、寸劇だけでは伝わりきらない部分があったと感じるので、後半プレゼン部分でももう少し第一話の説明を入れることができれば、聞き手にプレゼン内容をより理解してもらうことができたと思う。

もう一つは伝える情報の取捨選択だ。これは他の発表を聞いていても感じた。聞き手はプレゼンの内容を最初から最後までしっかり聞いているわけではない。聞き手の一番興味を惹く部分、惹かせたい部分を決めて、班で話し合った上でそれを軸に作成すれば良かった。他の班がただあらずじ説明に大半を割いてしまっているのは、見ていてとても勿体無く感じた。自分の班は半分寸劇にして

いた分、聞き手の集中力を削りすぎない構成にできていたが、書誌情報・作者紹介の部分と、「どうしてこの本を読んでほしいのか」という一番伝えるべき部分との起伏がなかった。その起伏がつけられていれば、かなり良い発表になったと思う。

あとは、先生もおっしゃっていたが聞き手のリアクションと呼応させながらの発表も大事だと思う。前に立っていて、途中で、聞き手が置いてけぼりになってしまっていることに気づいて、心が痛かった。

どの部分も準備と経験で向上させていくものだと思うが、一番大切なのは「聞き手の行動を促す」という目標を見失わないことだと感じさせられた時間だった。今後にしっかりと活かしたい。

[2]

ひとまず良かったことは、本番の日にグループメンバー 5 人全員が集まって発表することができたことだ。自分たちの発表は基本的に全員が揃わないと成立しない構造をとっていたため、一人も欠けることなく出席し、発表に参加できたことは幸いだった。

そして、予定していた役割は全員がそれぞれやりきることができた。他のメンバーは本当に頑張ってくれた。失敗すると思っていたわけではないが、彼らが真面目に取り組んでくれたおかげで、形にして受講者の皆さんに届けることができた。

反省点としては、講義内でも触れられていたが、やはり発表の際に原稿（スマホ）やスライドを見ながらになってしまっていたことがあげられる。自分たちの発表の構成は 5 人での寸劇。その中で最も役割の少ない自分が本の紹介をする、というもので、後半部はほとんど自分がスライドを提示しながら原稿を読み上げるような形になってしまっていた。また、緊張もあって早口になってしまってもいたはず。時間管理で致命的な欠落は無かっただろうが、ここも改善点だ。

自分が足を引っ張ってしまうことになり、他のグループメンバーには申し訳ない結果になってしまった。独りよがりの発表ではなく、あくまで教育プレゼンテーションであるという認識を失念していたのが原因だ。

自分がいかに本を紹介するか、どう内容を伝えるか、という点ばかりに気を取られてしまって、観客側としての視点が欠落してしまっていた。その点、他のグループの中には、こちら側に目を合わせながら声をかけたり、原稿を見る量を最小限にしたりといった工夫をしているところもあったので、自分が情けない。次の機会では彼らを見習って、観客のことを考えた発表を心掛けたい。

そのほか、他のグループで自分が印象的だったのが、『ふしぎな図書館』を紹介していた「人間合格」さんだ。スライドに、本の挿絵を他の画像素材と共に用いて、アニメーションなどと組み合わせるアイデアは自分にはなく（といっても本に挿絵がなければそもそも成立しないのだが）、なるほどと思った。

今回取りあげた感想では、ずいぶん細かい反省点が指摘されているが、これはネガティブな「振り返り」ではない。むしろ受講生たちが教育プレゼンテーションに必要な技術に目が行き届いている証左である。実際この二つのグループ発表はクオリティーの高いものであった。

9 考察

今回の教育プレゼンテーション実践からいくつかの成果と課題が出てきた。現在この「国語表現法」では振り返りも含めた形で課題を出題している。特に教育プレゼンテーションを扱っていた時期は、個人の進捗状況とグループの進捗状況をかなり細かく報告させていた。それらの報告をもとに講義開始前（30分前）に細かい打ち合わせやアドバイスをすることができた。受講生たちも教育プレゼンテーションのグループワーク学習でPBL（Project Based Learning）的な活動が多少経験できたのではないだろうか。

ただ「国語表現法」は国語に関する基礎的な事項の確認等も講義内容としており、半期間すべてにわたって教育プレゼンテーションで行ったやりとりは時間的には厳しく、さまざまな工夫が必要だと思う。

また今回は講義内におけるファシリテーションの説明が不足していたと感じた。従来講義内でのファシリテーターは教員にあたる。この点に関しては一応の説明は行ったのだが、グループワークファシリテーターの技法に関しては時間の

都合上詳しく説明ができなかったのは残念であり、今後の課題としたい。

(終わり)

注

- (1) 2023 年度、中京大学文学部の「国語表現法」シラバスは大学の HP で公開されているので詳細はご参照いただきたい。以下にシラバスの一部を抜粋した。

全 15 回の限られた講義時間内ですべてを網羅することは困難だったが、あえて総花的な講義内容ではなく受講生の講義理解の程度や興味の所在等を勘案して、講義内容を精選・再構築した。(学期途中で変更した講義内容については受講生に再配布した)

- 1 ガイダンス (講義概略、履修上の注意、予習・復習の仕方)
 - 2 自己紹介 (言語コミュニケーションとしての自己紹介の必要性和その実践)
 - 3 ノートテイキングの方法(アカデミックスキルズとしての「ノートをとる」ことの意味。インプットした情報の再構築について)
 - 4 演習 (ゼミ) 形式の講義について(演習という授業の意味について。演習形式における講義の準備、参加のしかた、レジュメ作成のルール)
 - 5 論理的文章 (その 1) (論理的文章を読む、テクニカルタームという概念理解)
 - 6 論理的文章 (その 2) (論理的文章の構造理解)
 - 7 レポートの書き方 (その 1) (出題の意図をつかむ。「正しい」情報収集の方法およびルールについて学ぶ。)
 - 8 レポートの書き方 (その 2) (結論から問題設定へ。アウトラインの構築のしかた。キーワードの設定。)
 - 9 ポートの書き方 (その 3) (模擬レポートの作成と推敲の実践)
 - 10 議論の方法と実践(会議、議論のルール、ディベートの実践、教室プレゼンテーション)
 - 11 言葉の感性を磨く (その 1) (ブレインストーミング・ブレインライティングを利用したキャッチコピー作り)
 - 12 言葉の感性を磨く (その 2) (ストーリースクランブルを使ったプロット (小話作り))
 - 13 言葉の感性を磨く (その 3) (プロットをもとにした世界観の創作及びプレゼンテーション。二次創作の方法について。)
 - 14 生活の中の国語表現(日本語の豊かさ及び日常生活における言葉の問題について)
 - 15 まとめ(講義全体の学習内容の整理と確認および質疑応答)
- (2) 「企業の求める人材像についてのアンケート結果」2004 年 11 月 8 日、日本経団連教育問題委員会。

<https://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2004/083.pdf>

(2024 年 1 月 1 日最終閲覧)

- (3) 「大学初年度における国語表現教育について」 その方法と実践 稲垣広和。
「中国国文学」第31号（平成4年3月）では当時指摘されていた学生の読解力不足を解消する方法として初年次教育の重要性を指摘し、その実践方法の一部を紹介した。
- (4) 「日本大百科全書」（小学館）豊田彰による。
- (5) 「アカデミック・スキルズ」大学生のための知的技法入門、佐藤望他編、2006年10月20日、慶應大学出版会、p. 121
- (6) 「Master of Presentation」立教大学大学教育開発・支援センター
<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe/master.html>
(2024年1月1日最終閲覧)
- (7) 「教室プレゼンテーションの20の技術」堀裕嗣・研究集団ことのは著、2002年7月、明治図書 pp. 28-31
- (8) 「学校教育におけるグループワークの方法と課題」丹治光浩、「花園大学社会福祉学部研究紀要」第21号、2013年3月 pp. 111-112
- (9) 「グループワークファシリテーションの意義と実践」
「大学等におけるキャリア教育実践講習テキスト」p. 126、キャリア・コンサルティング協議会
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11800000-Shokugyououryo-kukaihatsukyoku/0000087057.pdf>
- (10) (7)に同じ。p. 35

参考文献・資料

1. 「大学生のための日本語学習法」柴田義松、鈴木康之、鶴田清司編、2005年4月15日、学文社
2. 「教室プレゼンテーションの20の技術」堀裕嗣・研究集団ことのは著、2002年7月、明治図書
3. 「企業の求める人材像についてのアンケート結果」2004年11月8日、日本経団連教育問題委員会
<https://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2004/083.pdf>
(2024年1月1日最終閲覧)
4. 「2005年度・新卒者採用に関するアンケート調査集計結果」2006年1月26日、
<https://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2006/002kekka.pdf>
(2024年1月1日最終閲覧)
5. 大学等におけるキャリア教育実践講習テキスト
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11800000-Shokugyououryo-kukaihatsukyoku/0000087057.pdf>
キャリア・コンサルティング協議会
6. 「プレゼンテーション授業を基盤としたPBLとその効果」石井三恵、石田裕子、

河野彩 広島女学院大学生生活科学部紀要第 18 号 pp. 15-34

7. 「ICT を活用した教育プレゼンテーション能力の育成」『情報学研究』第 26 巻
2017 年 3 月 pp. 1-13 下野正代
8. 「専攻に根ざしたプレゼンテーションによる PBL」佐々木智之 北海道科学大学
研究紀要第 41 号 (平成 28 年) 教育実践報告

補足資料

本の基本情報およびグループワークに関しては以下の簡便な資料を配付した上で説明を行った。

2023 年度 中京大学 文学部「国語表現法 1」配付資料 第 14 回

「教育プレゼンテーション・小説を薦める」レギュレーション (実践課題・GW)

1. 今から、グループを結成します。1 グループは 4 名～6 名で結成してください。
2. グループ名を決定します
3. 代表者 (リーダー) を決定します。リーダーは今回のプレゼンテーションについて、資料制作や発表に関してのディレクションをします。(グループ内で仕事量の公平性を確保することや議論をスムーズに進めるのも仕事です)
4. グループ毎に話し合い、本の方向性を話し合う (なるべく具体的に)。決定した後、図書館に行ってグループで本を 1 冊借りる。(借りたら教室に戻る)
5. 本の基本情報を書き、内容を理解することによって「本」を「情報化」する
6. 発表資料を作成し、プレゼンテーション実践 (1 グループ準備も含めて 15 分程度で行います)。
7. 評価文および実践感想文作成及び提出

今回は中京大学図書館で借りられる本から本を選んでください。

何故か 行動意欲の喚起が目的だから

図書館では静粛にしてください

(本の基本情報とは?)

「タイトル」(略さない) 今回は小説限定なので、短編を取り上げる場合は単行本名と小説名が一致しない場合も想定されます。その場合はどちらも明記してください。

著者 (フルネームで、著者が複数人の場合にも基本的には全員の氏名を書く)

出版者・発行所

発行年月日

総ページ数 (総ページ数 ** ページ、該当ページ ** ~ ** ページ)

本に関する情報 (お勧めポイント等)

簡単な梗概を 800 程度で作成してください。

作者について説明する場合は引用元を明確にしてください。

講義で学んだ「小説の読み方」を参考にして、資料を作成してください。

(名古屋音楽大学音楽学部非常勤講師)